

『人斬り』 少女、公爵令嬢の
護衛になる

著：笹塔五郎

イラスト：ミュキルリア



GCN文庫

第一章 人斬り少女

第二章 もう一人の人斬り

第三章 裏切り

第四章 旅の終焉

第五章 たとえ世界中

エピローグ

あとがき

目次

プロローグ

幼い頃からシユリネ・ハザクラは、ある人に仕えるためだけに育てられた。その人を守るために剣術を磨き、強くなることだけを必要とされたのだ。

そう教え込まれたから、別に生き方に疑いを持つたことはない。

言われた通りに剣術を学び、シユリネは気付けば強者との戦いを好むようになっていた。キッカケは何だったか覚えてはいないけれど、弱い相手との戦いは面白くなくて、強い相手とのギリギリの命の奪い合いこそが、シユリネに唯一楽しみをくれた。

「人斬り」などと呼ばれたこともあるが、シユリネは決して快楽に任せて人を斬ったことなどはない。ましてや、守るべき対象を斬ることなどありえない——のだが。

「奴はどこへ行った!? この辺りにまだいるはずだ!」

怒号が聞こえ、数名の人々が血眼ちまなこになって人捜しをしている。

彼らが捜している相手は、シユリネだ。

シユリネは十五歳の誕生日を迎えて、今日から護衛としての任に就く予定であった。

護衛対象であるその人は、対面した時にはすでに死んでいた。何者かに斬られたようであったが調べる間もなく、シュリネが謀反人として扱われたのだ。

おそらく、誰かに嵌められたのだろう。

シュリネがやってきた日に何者かが事件を起こすことで、シュリネに濡れ衣を着せたのだ。

そして、誰一人としてシュリネを擁護する者はいなかった。親しい者などおらず、剣の道に生きてきたのだから、当然と言えば当然だろう。

「……はあ、どうしてこうなったのかなあ」

長い髪を後ろに束ね、今日から初めての仕事ということで、珍しく身なりも整えてきたけれど、せっかく新調した服も無駄になってしまい、大きく溜め息を吐く。

シュリネが剣の腕を磨いてきたのは、名家の生まれであるその人を守るためであった。顔を拝見したことは数度で、話したこともほとんどないが。

ようやく、これからという時に——シュリネは、自らの力を振るう場所を失ってしまった。

ここにあるのは、真正正銘の『人斬り』としての汚名のみ。捕まれば当然、死罪は免れ

ないだろう。

きつと、シュリネには弁明の機会すら与えられることはない。

あるいは、見つけ次第『斬る』ように命令が下っているかもしれない。

「なら、ここにはもう用はないかな」

生まれ育った土地とはいえ、未練などない。

シュリネは自由になったのだ——誰に命令されることもなく、縛られることもない。

だが、本当の自由を得るためには、ここではあまりに知られすぎている。

故に、シュリネのすべきことは一つであった。

「——どこへ逃げるつもりだ、シュリネ・ハザクラ」

名を呼ばれて視線を向ける。

そこには、刀を構え、鎧を着込んだ一人の男が立っていた。

見知らぬ相手だが、明確に敵意があることだけは分かる。

「あなたは……」

「お前にはここで死んでもらう必要がある。全ての罪を背負ってもらって、な」

その言葉だけで、理解するには十分だった。——目の前にいる男は、シュリネの敵だ。

「あなたが仕組んだの？ それとも、他に仲間が？」

「お前が知る必要もないこと。だが、お前は適任だったよ。『人斬り』になっても違和感のない——そういう娘だ、お前は」

「わたし、犯罪者以外は斬ったことないんだけど——まあ、あなたも似たようなものだからいいかな」

「ふっ、はははは！ こいつは驚いた。まさか、俺に勝つつもりか？ お前の持つ刀が、俺の鎧に通るとでも思っているのか！ これは我が屋敷に代々伝わる由緒正しき代物。たかが小娘一人に、斬れるはずもなろう」

「？ そもそも、あなたが誰か知らないし」

「知らぬと言うのなら、冥土の土産に教えてやる。俺の名は——かはっ」

瞬間、男は目を見開いた。言葉の途中で息を吐き出したのは、喉元を刃で掻つ切られたからだ。

見れば、少女は腰に下げていた刀を抜き放ち、その刃には鮮血が垂れている。

「……っ！」

パクパクと口だけを動かすが、声が出ない。

「いくら鎧を着込んでもさ、斬れるところを斬れば意味がないんだよな」



斬られた——油断していたのは間違いないが、十五歳になったばかりの少女に、男は簡単にやられてしまったのだ。驚くのも無理はないだろう。

だが、シユリネにとつて見れば、男は本気を出すまでもない相手であり、これ以上話すのも無駄だと考えていた。

「別に、あなたがどこの誰かとか、目的がなんだとか、そういうのに興味ないんだよね。ただ、一つだけ——ありがとう」

刀を振って鮮血を刃から飛ばすと、シユリネは男に向かって礼を述べた。

「あなたのおかげで、わたしは自由を手に入れたから。一人でどこか行ってみようとか、そういう考えもなかったんだけど」

シユリネの言葉にも、男は答えることができない。

斬られた喉からの出血は止まることなく、それが致命傷であることは明白だ。

よろよろとした動きで、シユリネに向かって手を伸ばし——そのまま力尽きた。

男の誤算は、シユリネの実力が想定を遥かに超えていたということ。『人斬り』などと噂されても、たかが十五歳の少女だと考えていたのだ。

——実際には、彼女に剣術で勝てる者など、この国にいるかどうかも分からないというのに。

シユリネからすれば男の素性は不明のままだが、もはやどうでもいい。

シユリネを嵌めようとしたというよりは、権力を手に入れるために利用しようとした、というところだろうか。

だが、この国を出ると決めた以上、もはや関係のない話だ。

「いたぞ、こっちだ——なっ!？」

シユリネを捜していた他の者達も駆けつけてきて、惨状に目を見張る。

首元を斬られ、まだ新しい血を垂れ流す遺体。それをやったのが、シユリネであることは明白だ。

言葉を失った男達に向かって、シユリネは淡々と言い放つ。

「追ってくるのなら斬る。たった今、そう決めたよ」

それは——シユリネにとっては決別の言葉であった。潔白を証明するよりも、濡れ衣であったはずの汚名を被り、罪人となる道を選んだ。

ここから先、先ほど斬った男とは全く無縁の者もいるだろうが、もう選別はしない。追ってくる者、敵対する者は全て斬り伏せる。

『人斬り』シユリネ・ハザクラが本当の意味で誕生した瞬間であった。

追手にも動揺は広がっているが、去ろうとする者は誰一人としていない。

目の前の状況を見ても、まだシユリネをただの少女と侮あなごっているのか——いや、むしろその逆。シユリネを明確な敵として認識したらしい。

シユリネはそんな彼らを見て、小さく溜め息を吐いた。

「はあ、別にいいけどね。ただ——容赦はしないよ」

それが開戦の合図となり、数分後には血の海が広がっていた。

シユリネを追った者のほとんどは斬り殺され、歴史に名を刻むほどの大罪人として知られるようになる。

だが、その頃にはシユリネは国を去っており、戻ってくることはなかった。

第一章 人斬り少女

——三か月後。『リンザルム王国』の東、『アーゼンタの町』にシユリネの姿はあった。行き交う人々の多くは、ちらりとシユリネに視線を送る。

この辺りでは珍しい黒髪に、東の国に伝わる派手な柄の服装もまた、それに拍車をかけていた。

だが、周囲の視線など気にすることなく、シユリネは一人、眉をひそめて唸る。

「……どうしよう。王都に行くか、ここは『外す』か」

シユリネが見ているのは時刻表であった。ほぼ同時に、違う方角へ向かう『魔導列車』がある。

片方は王都行きで、もう片方は外回りに他国へと向かう。

目的のある旅をしているわけではないシユリネにとって、方向自体はどちらでも問題ない。

ただ、路銀が底を突きかけている、という深刻な問題があった。

「王都に行つて稼ぐところなかつたらなあ……」
 辺境地では、魔物狩りなどで臨時報酬を得ることも可能だった。

「だが、発展した土地となると話は別——何らかの組織に所属していないと、仕事を得るのは難しいという状態だ。」

放浪の旅をしているシユリネにとつては、今のところどこかの組織に所属する予定はないし、何よりまだ若すぎるために、魔物討伐など自らの力を生かしたいところで雇つてくれるかどうか怪しい。

けれど、旅を続けるにはどうしても金の問題は付きまどってくる。

「こういう時は……」

腰に下げた刀を鞘ごと抜くと、シユリネは地面に突き立てた。真つすぐ立てて手を離すと——その方角は、外回りのルートを示していた。

これで決まりだ、王都に向かう必要はない。

迷つた時は刀の示す方角に進んで、この三か月間は過ごしてきた。

今回もそれに従つて、シユリネは魔導列車へと向かう。

外回りの魔導列車は辺境地も通る予定であり、乗客は疎らであった。

やはり、魔導列車内でもシユリネには視線が集まりがちだが、特に気にせず空いている

席に座る。

「……」

「……」

そこで、通路を挟んだ席に座る少女と目が合った。

一目で高貴な生まれであるというのが分かる服装。整った顔立ちに美しいブロンドの髪色——間違いなく、彼女は貴族だろう。

その対面には、おそらく従者であろう女性が座っている。白と黒を基調とした服に身を包んでいた。

いつもなら視線を逸らしておしまいが、他の人とは異なる雰囲気だった少女に、思わずシユリネは言葉を発する。

「何か？」

「珍しい服だと思って」

「ああ、これ？ 東の方じゃ結構見るんだけど、こっちじゃ珍しいみたいだね」

「初めて見たわ。中々素敵じゃない」

「そう？ わたしからすると、あなたの服の方が珍しいけどね」

「なるべく地味なものを選んでるつもりだけど、そう見えるかしら？」

「わたしはこっちの人間じゃないからね」

「へえ——」

「お嬢様」

まだ少女は会話を続けようとしていたが、対面の女性が一言発すると、不服そうな表情をしながらも押し黙る。

女性の方も、シュリネの方を見て軽く会釈していた。

『お嬢様』と呼ぶくらいだから、やはり高貴な生まれではあるらしい。

(本当なら、わたしはこういう人を守る予定だったんだよね)

今更、考えたところで仕方ないが——護衛として働く自分を想像しなかったわけではない。

目的のない自由な旅も悪くはないが、金銭面の問題に直面して、シュリネはすっかり現実を味わっていた。知らない国を旅するというのが、まだ十五歳の少女にとっては純粋な負担なのだ。

少女から視線を逸らして、窓の外を見る。

最後に数名乗ってきたところで、魔導列車はゆっくりと動き出した。

(王都も観光くらいしかかったけど、やっぱりお金がなあ……)

小さく溜め息を吐きながら、シュリネは今後のことを考える。

地方ならば、魔物に困っている人の依頼を受けて、お小遣いくらいは稼げるかもしれない——だが、そんな生活をいつまでも続けているわけにもいかないことは分かっている。

ならばどうするか、いよいよ定職に就くことの検討に入っていた。

「お嬢様、この後の予定ですが——」

隣では、先ほどの少女と女性が小声で会話を始めている。

彼女達も、地方で何か予定があるのか、それとも国を出るつもりなのか、それは分からないし、興味もない。だが、

(ん……?)

誰よりも早く気付いたのは、シュリネであった。

こちらに向かつて、前方と後方から三人ずつ近づいてくる人間がいる。

気配を殺し、足音も消しているからこそ、普通ではないことがすぐに分かった。

(まさか、このタイミングで追手……?)

辺境へと向かう列車内で、こっちに向かってくる謎の集団——シュリネを狙っていると考えるのが妥当だろう。

今まで、シュリネに対して追手が差し向けられたことは、国を出てからは一度としてな

い。
だが、いないとは限らない——何故なら、シユリネは大罪人として手配されているからだ。

（他に乗客もいるし、こんなところでやり合うのは面倒だけど……仕方ないか）
敵対するのなら斬る——それが、シユリネの信条だ。

同じ車両に集団が入ってきたところで、シユリネは腰に下げた刀の柄に触れ、ゆつくりと立ち上がる。

何故だか分からないが、こちらに對しての殺気は感じられない。気配を殺すのに長けているのか、相当な実力者か。だとすれば、

「少しは楽しめそうな——」

「ルーテシア・ハイレンヴェルクだな」

シユリネの言葉を遮ったのは、先頭を行く男であった。

フードを目深に被り、前方と後方からそれぞれやってきた六人はいずれも顔が分からないようになっていいる。

全員の視線が、シユリネの方に向けられた。それは隣に座る少女と女性も含めて、だ。当の本人は、困惑するように視線を泳がせている。

「え、あれ？ わたしの追手ではない？」

「何者か知らぬが、こんな小娘を護衛に連れているのか」

「彼女は関係ないわ。それで、私に何か用なの？」

少女——ルーテシアは立ち上がって、男の言葉に答えた。

堂々とした受け答えだが、これで状況を理解する——シユリネは、とんでもなく恥ずかしい勘違いをしていた。

自分を追って来た刺客かと思えば、全く別人を狙った刺客であった。

こんなことがあるのかと思ひ、思わず赤面してしまう。恥ずかしがっているシユリネを

よそに、状況は進行する。

「用はある。すぐに済ませるつもりだ——お前の命を奪うだけだからな」

「何ですって……？」

男達は懐に隠したナイフを一斉に取り出し、構えを取る。

ルーテシアを庇うように女性が動き出したところで、その場にいた全員が動きを止めた。

「……何の真似だ？」

先ほどから話していた男の首元に、シユリネは抜き放った刃をあてがっていた。

ルーテシアと女性は、驚きの表情でこちらを見ている。

シユリネは視線を男達に向けたまま、

「理由は分からないけど、この人達はあなたのこと狙っているみたいだね」

「そうみたいね」

「小娘——」

「あなたには聞いてないから、黙っててよ」

刃をわずかに滑らせると、男は再び沈黙した。

この距離で下手な動きをすれば首を斬られる——それくらいは理解しているだろう。

「それで、切り抜ける手立^てはあるの？」

「……質問の意味が分からないわ」

「だから、こんなに簡単に近づかれてさ、あなたを守ってくれる人はいないの？」

「……」

そう問いかけると、ルーテシアは押し黙る。

目の前の男達はずでに武器を手を取っていて、シユリネも抜刀してしまっている。相手が動いていないのは運がいいと言えるが、いつ動き出すとも限らない。

シユリネは小さく溜め息を吐くと、本題を口にする。

「わたし、ちょっとお金に困ってるんだ。護衛が必要なら、たつた今から雇われてあげる

けど」

「護衛って……貴女^{あなた}は一体——」

「お嬢様、失礼を」

ルーテシアの言葉を遮って、彼女を守るように動いていた女性が口を開いた。

「私はハイン・クレルダ。ルーテシアお嬢様にお仕えする身です。単刀直入にお聞きしますが、あなたを雇えばこの状況を打破できると仰っているのですか？」

「確約はしないけど、いないよりはマシじゃない？ あなた一人で切り抜けるつて言うなら、別に雇わなくてもいいし」

「ちよつと、ハイン。話しているのは私で……」

「あなたの言う通りです——では、お願い致します」

シユリネが問いかけたのはルーテシアの方であるが、彼女に代わって返答がきた。

女性——ハインの方が、状況をよく理解している、というところか。

言葉を受けて、シユリネは目の前の男に言い放つ。

「そういうわけで、今からわたしはあなた達の敵だから」

「……ッ」

同時に、首元を斬り裂くように刀を振るう。

すぐにシュリネは振り返ると、後方にいた敵に対しても刃を振り下ろした。斬り伏せた相手をそのまま蹴り飛ばすと、シュリネは勢いに任せて刀を突き刺す。

「がはっ!?」

後方にいたもう一人の敵の腹部まで突き刺さったところで、控えていた残りの三人が動き出す。

シュリネの前の一人はわずかに後ろに下がると、数本のナイフを取り出した。

即座に距離を取って戦った方がいいと判断したのだろう。

後方のもう一人はシュリネに向かって真つすぐ動き出し、もう一人は——ルーテシアに向かっていく。

それぞれが明確に役割分担して、仕事を完遂しようとしている。

あるいは、先行していた仲間がやられた場合も想定していたのか。

目の前の敵がナイフを投擲すると同時に、シュリネは跳躍した。

それほど高くない車両の中でぶつかるギリギリまで飛び、椅子の上に着地する。

投擲されたナイフは仲間の方へと向かっていくが、咄嗟に切り払うだろう。

その間に、ルーテシアに向かった相手と対峙し、

「ちょっと伏せてね」

シュリネが言うと、ハインが反応してルーテシアに覆いかぶさるような動きを見せた。彼女の反応から見ると、それなりの実力者ではあるようで、護衛の役割も果たしているのだ。

シュリネはそのまま椅子を蹴り、交差するように一閃——ルーテシアに向かって来た敵を斬り捨てる。

「……? な、なんだ!？」

ここでようやく、同じ車両に乗っていた乗客の慌てる声が耳に届いた。戦闘が始まってからまだほんの数秒——反応が遅れるのも無理はない。

幸い、ルーテシアの座席の前後に乗客はいないため、このまま戦闘は続けられる。

座席から座席へと跳ぶように移動したシュリネは、そのまますぐ近くにいた刺客の首を刎ねた。

スパンツと音が響き、綺麗に首が飛ぶ。これで五人目——最後の一人は、背を向けると素早い動きで車両から逃げ出した。

本来ならここで追いかけるところだが、他に敵がいるかもしれない。

倒した相手の中にもまだ生きている者はいるが、シュリネは無視してルーテシアとハインに声をかける。

「とりあえず切り抜けたけど、この後は？」

「緊急事態ですので、魔導列車を停めます。お嬢様、こちらに」

「……っ、仕方ないわね」

ルーテシアはやや不服そうな表情をしながらも、ハインの言葉に従って動き出した。

魔導列車の車両と車両の間に行くと、ハインはすぐにそこにあつたベルを鳴らした。

大きな音と共に、魔導列車が揺れる。

「お嬢様、こちらにお掴まりください」

言われるがまま、ルーテシアは手すりを握る。

シュリネは大きく揺れる中でも、バランスを崩すことなく立っていた。

「この音は何かの報せ？」

「車両内で問題が発生した場合に、緊急停止を促すベルです。今、まさに緊急事態です
で」

「なるほどね。停めた後はここから逃げる、でいいのかな」

「いいえ、魔導列車には王国の騎士が駐在していますし、まだここは町の近くです。すぐ
に応援が来るでしょうから」

「そこまで守り切れればいい、と。なんだ、もう終わったようなもんだね」

他に刺客が潜んでいないとも限らないが、少なくとも近くに気配はない。

もうしばらく、近くにおいて守れば仕事は完遂できそうだ。

「貴女は……何者なの？」

ルーテシアがシュリネに問いかけてきた。

その表情から窺えるのは、疑念。いきなり刺客と戦って助けてくれる人が現れるなんて、
信じがたいと言ったところだろうか。

確かに、常人ならば何もできない状況には違いない。

だが、幸か不幸か——シュリネは普通の人間ではなかった。

「そう言えば、まだ名乗ってなかったね。わたしはシュリネ・ハザクラ。まあ、見ての通
りの旅人だよ」

「旅人……？ そんな人が、どうして私を助けようとするのよ？」

「どうしてって、さつきも言ったでしょ。仕事として引き受けたの。旅の資金が底を突き
そいで」

「旅の資金って……。まさか、本当にそんな理由で？」

ルーテシアはまだ納得がいていない様子だが、シュリネにとってはそれ以外の理由は
特にない。あえて言うならば、

「あとは……わたしって元々、あなたみたいな高貴な人を守る仕事に就く予定だったから。何となく、こういう仕事を一回くらいしてみたかったってだけ」

「え？ それは、どういう——わっ!？」

ガタンッ、と再び車両が大きく揺れ動く。

停止しかけていたはずの魔導列車が、再び加速し始めたのだ。

何が起こったのか、確認しなくても分かる。

「魔導列車ごと乗っ取られたみたいだね」

「やはり、他に仲間がいたようです」

「な、ここまでする……!？」

毅然としていたルーテシアも、さすがに動揺の色が隠せなくなってきたよう。

こうなってくると、気になる点がある——ここまでして狙われる理由はなんなのか、だ。

「ルーテシアはどうして狙われてるの？ やっぱり偉い人だから？」

「別に、私は偉くもなんともないわよ。貴族の家に生まれたってだけで」

「……」

ルーテシアよりも、ハインの方が狙われる理由を知っていきそうな反応だった。

だが、彼女はここで話をするつもりはないらしい。

「ま、いつか。あなたの護衛——それが、わたしの受けた依頼だから。報酬は後で相談させてもらうけど。次はどうするの？」

「魔導列車を奪還する——それしかないかと。敵はおそらく、この列車ごとお嬢様を始末する気です。乗客もろとも」

「！ な、何よ、それ……頭おかしんじゃないの!？」

「確かに、正気じゃないね。じゃあ、敵は全部始末する……そういう方針でいい？」

「はい、構いません」

「ちょ、ちょっと！ 私を差し置いて何を勝手に——」

「お嬢様、今はどうかご自身の安全のみをお考えください」

ハインが膝を突いて、ルーテシアに言った。

彼女がルーテシアに対して忠誠を誓っていることが分かる。

それでも、ルーテシアの表情は納得していなかったが、

「わ、分かったわよ。従えばいいんでしょ、今は」

「ありがとうございます」

「話がまとまったなら——」

シュリネは刀を抜き放ち、連結部の扉に向かって刃を突き立てる。その向こう側には、

シユリネ達を追ってやってきた刺客の一人がいた。

「気配で丸分かりだよ」

ずるりと刃を抜いて、シユリネはルーテシアとハインに向き合う。

「改めて……話がまとまったなら、さっさとこの魔導列車、取り返そうか。わたしが先行するから、ついてきてくれる？」

「はい、お願いします。お嬢様、参りましょう」

シユリネが前に行く形で、魔導列車の中を進んでいく。

乗客達は加速していく魔導列車に混乱している様子だが、気にしている場合ではない。

操縦席は一番前方にあるはず——二両ほど進んだところで、前方から三人組が姿を現した。

「基本は三人で行動してることかな」

刺客の一人が姿勢を低くして、駆け出す。

後方の二人が援護をするつもりなのだろう——だが、シユリネはそれよりも早く動いた。駆け出してすぐに跳躍し、刃を振るって刺客の首の辺りを斬る。

鮮血が舞い、そのままシユリネは勢いのままに刃を後方の二人へ投げ飛ばした。

「ガッ——」

「ひ、ひい……!?!? なんだ!?!」

「ごめん、説明してる暇はないんだよね」

怯える乗客に、そう一言だけ答える。

残りの刺客が、シユリネの投げた刀を握り、相対した。

「武器を手放すとは、愚かだな」

「あなたくらいなら、これで十分だよ」

そう言って、シユリネはナイフを見せる。

すぐ傍で食事を摂っていた乗客から奪ったものだ。

「紙めるなよ、小娘が」

刺客は刀を構えたまま、駆け出した。

シユリネも距離を詰めると、刺客が刀を振るう——だが、座席にひっかかり、動きが止まった。

「……っ!」

「馬鹿だね、使い慣れない武器ならそうなるって」

魔導列車の中では、そもそも刀は簡単に振り回せるものではない。

シユリネだからこそ扱えているのであり、むしろナイフなどといった武器の方がここで

は戦いやすいのだ。

ちびっちょ

躊躇なく、シユリネは刺客の首元にナイフを突き立て、引き裂いた。

そのまま、前方の座席に隠れていた刺客に対し、ナイフを投げて突き刺す。

「四人組だったんだね。ちょっと気付くのが遅れたよ」

「ぐ……くそ——かはっ」

シユリネは刀を握って、そのまま刺客へとどめを刺す——乗客達は騒いでいたが、突然始まった『戦い』に気付けば静かになっていた。

シユリネは振り返って、控えていたルーテシアとハインを呼ぶ。

「このまま、操縦席まで一気に行こう」

「……本当に、何者なの？」

「分かりませんが……どうやら、雇って正解ではあったようです」

ルーテシアの疑問に、ハインは答えられない——だが、間違いなく言えることは、シユリネの強さは異常だった。

——魔導列車の先頭車両に、ヴェルト・アーヴァイスはいた。

筋肉質な身体からだつきで、魔導列車の普通の人間であれば楽々と通れる広さのある通路も、

彼にとっては狭く見えるだろう。

数名の部下を引き連れて、完全に制圧した状態だ。

ここに待機していた騎士もいたが、すでにヴェルトによって葬り去られ、遺体は魔導列車の外に投げ出された。

それだけで、見せしめには十分な効果がある。——逆らえば死ぬ、という絶対の恐怖が。

「——なあ、オレはこんな仕事を終わらせて、今日はさっさと飲みに行きたい気分なんだ」

不意に、ヴェルトは口を開いた。

それを聞いて、部下達は少し焦った様子を見せる。

「ターゲットは小娘一人。オレ達、猟兵団の敵じゃあねえ——だろ？ とつくに終わってはずなんだよ、この仕事は」

「はい、その通り——」

「だったら、なんでまだ終わってねえッ!? どころか、乱入してきた小娘にやられて帰ってきた奴までいやがるじゃあねえかッ!」

ドンツ、と拳を床に叩きつける。先ほど、ルーテシアを始末するために送り込んだ六名のうち——生きて帰ってきたのは一人だけ。

ヴェルトはそんな簡単な任務に失敗した部下を生かしておくほど甘い男ではない。車両の壁にめり込むように打ちつけられ、絶命した死体がそこにはあった。

「わ、分かりません。確か、護衛のメイドが一人いたはず!」

答えた部下の一人が、ヴェルトに頭を掴まれて驚きの声を上げた。

「メイドが一人? なら、小娘が二人になっただけだ。それで、どうしてまだ終わらねえ? オレの部下に弱い奴はいらねえんだ……分かるよな?」

「ギ……ア」

ミシミシと頭を握るだけで、骨が軋む音が響く。

だが、ヴェルトは不意に何かに気付いたように離れた。

「おっと、いけねえな。お前はまだ失敗はしてない奴だ。ここで殺すのは、ただの損失になる。オレとしたことが、危うく自分の信条を破るところだったぜ」

頭を潰されそうになった部下は、怯えた表情でヴェルトを見る。まだ失敗していない

——生かされた理由はそれだけだ。

そんな時、部下の一人がまた、報告に戻ってきた。

「ご、ご報告が……」

「いい報せなんだろうな?」

「それが、始末に向かった者が次々と——」

「おい、失敗したのなら、何でお前は戻ってきたんだ? オレは『始末した』以外の報告を聞くつもりはないんだが」

ヴェルトが言葉を遮ると、周囲は静寂に包まれた。

ゆつくりとした動きで、ヴェルトは報告に来た部下の前に立つと、そのまま拳を振り下ろした。

ズンツ、と車両全体が揺れるような衝撃。拳一つで、簡単に人を殺せる威力があった。「どいつもこいつも使えねえ。オレが直接、潰してきてやる」

血に濡れた拳を握りしめ、ヴェルトは隣の車両へと移る——

「なんだ、もう来やがったのか。手間が省けたな」

そこには、刀を握った少女が一人、待ち構えていた。

先頭車両の付近までシュリネは止まることなく、進み続けた。送られてくる刺客の全てを斬り殺し、ついに刺客の頭目とうもくと思しき男おとこと対峙する。

「……おい、おいおいおい！ 小娘二人に何を手間取ってるのかと思えば、三人目がいたのか！ こりゃあ傑作だ。オレの部下が、小娘三人にほとんどやられちまったのか？」

「やつぱり、あなたがリーダーなんだ。他の人達とは違って多少は戦えそうだね」

「なんだ、お前は。ターゲットでも、お付きのメイドでもねえだろ」

「わたし？ わたしはさっき護衛を頼まれたから、送られてきた刺客は全員始末したよ」

「お前が？ 一人で、か？」

「護衛だから、そうでしょ」

「は——ははははははははっ！」

シュリネの言葉に、男は大声で笑い出す。

車両の天井にまで届きそうなほどの体格で、声だけでまるで車両全体が震えるようだ。

「はははははは……はあ、久しくこんな笑ったことはねえ。お前がオレの部下を全員やったって？ なら——証明して見せろッ」

男が拳を振り上げ、シュリネに向かって殴りかかる。

咄嗟に、後方へと下がった。車両の床に拳が衝突すると同時にメリキッと鈍い音を立て

て、全体を大きく揺らす。

「——っと、馬鹿力だね」

「オレはこの拳で何百人も殺してきた猟兵だ」

「？ 猟兵なのに、拳で殺してるんだ？ 武器を使うのが普通だと思うけど」

「武器も使えるさ。だが、こういう場所じゃあ、拳でやるのが一番楽だろ？」

「それは否定しないけど——」

「ちょっと！ あなたが私の命を狙っている奴らのリーダーなんでしょ！ 一体、どういうつもりなの！」

シュリネの言葉を遮るようにして声を上げたのは、ルーテシアだ。車両の後方に控えていたが、やはり命を狙われる理由は知っておきたいのだろう。

「オレは依頼を受けただけだ。お前を殺す依頼をな。理由なんてどうだっつていい」

「な……っつ」

「うん、わたしもそれは同意見だよ」

言葉を失うルーテシアに対して、シュリネは男に同意する。

「わたしは彼女を護衛するだけ。だから、敵であるあなたは——斬る」

「ははははははっ！ 二度も笑わせてくれるじゃねえか。お前、名前は何て言う？」

「ん？ シュリネだけど」

「シュリネか。オレはヴェルト・アーヴァイス——今からお前を殺す男の名をよく胸に刻んで……逝けッ」

男——ヴェルトが駆け出す。狭い車両の中、周囲を破壊する勢いで向かって来る。おそらく、シュリネごとルーテシアを殺すつもりなのだろう。

確かに、拳の威力を一撃でも受ければ、シュリネの身体は簡単に潰されてしまう。掠るだけでも致命傷に繋がる——細い刀では、受けることは難しいだろう。

故に、シュリネはヴェルトへと向かっていった。

狙われているのがルーテシアであり、護衛という役目を果たすのならば距離を詰めるのが正しい。

当たり前だが、ヴェルトは乗客など気にせずに攻撃を仕掛けてくる。

シュリネもまた同じ——護衛の任務に必要なのは、対象を守ることだけだ。ただし、「あなた程度なら、乗客を守りながらも戦えるかな」

「……な、がああああああああッ！」

ヴェルトの叫び声が響き渡る。

拳が振り下ろされる瞬間——シュリネはさらに加速して、ヴェルトの懐に入った。

そのまま、ヴェルトの腕を肘の辺りで切断する。

太く硬い腕ではあったが、骨の隙間を狙えばシュリネの刀でも簡単に切断することができた。

何より、刀にはさらに『切断特化』とするために微量の魔力を纏わせている。

「この、小娘がア……！ よくも——」

「悪いけど、話をする暇はないと思うよ」

シュリネは跳躍し、ヴェルトの顔の前で刀を振るう。

ギリギリのところまでヴェルトは残った左腕の掌でそれを防ぐ——魔力を帯びた手甲は頑強であり、骨の辺りでピタリと止まって完全には斬り落とせなかった。

ヴェルトの受けた傷は深刻なはずだが、力任せに腕を振るおうとする。

シュリネはすぐに刀を手放して、距離を取った。

「……認めてやる」

「？」

「お前は強い。オレの片腕を奪い、もう片方の腕もこの様だ。あの状況で、前に向かってくるなんて狂ってるというほかない。だが……」

ヴェルトはシュリネの刀を見せつけるように、手を前に出す。



「得物がなければ、ただの小娘だ……ッ」

「なにそれ。勝ったとも言いたいの？」

「違う。お前、そいつからいくら金をもらう予定なんだ？」

「まだ決めてないけど」

「そうか——なら、金ならいくらでもやる！ オレにつけ」

「……はあ？」

シユリネは眉をひそめ、ヴェルトを睨んだ。

今、この男はとんでもないことを口にしてる。

「お前は金で雇われただけなんだろう……？ オレはもう、これ以上お前と戦うことにメリットを感じない」

「それがどうして、わたしがあなたにつくことになるの？」

「その小娘——ルーテシアの命を狙ってるのは、オレだけじゃねえ」

「……っ！」

ヴェルトの言葉に、ルーテシアは驚きの表情を浮かべる。

彼女が狙われている理由を、シユリネはまだ知らない。

ルーテシア自身もよく分かっていない様子だった——ヴェルトは当然、その理由を知っ

ているのだろうか、おそらく言うつもりはないだろう。

だが、ヴェルトの言いたいことは分かった。

「つまり、ルーテシアを護衛するのはリスクが高い、だから自分と組み——そういうこと？」

「よく分かっているじゃねえか。ここで出会って依頼を受けただけの関係なんだろう……？なら、オレと組んだ方がさっさと仕事も終わって、金も稼げる——違うか……!？」

ヴェルトからは必死さを感じた。

なるほど——頭に血が上っていたように見えたが、意外と冷静だ。状況が不利と判断するや否や、まだ関係が希薄である点を突こうとしているのだろう。

シユリネは小さく溜め息を吐くと、くるりと踵かかとを返し、ヴェルトに背を向けた。ルーテシアの隣にいたハインが素早く反応し、彼女を庇うように前に立つ。

「はっ、ははははは！ 話が早くて助かるぜ！」

「——勘違いしないでよ、あなたにはもう戦う価値がないからやめるだけ」

「……なんだと？」

シユリネは再び、ヴェルトに向き合う。

すでに臨戦態勢を解除したシユリネは、

「もう、わたしと戦う気がないんでしょ？ なら、さっさとわたしの前から消えてくれる？ そうしたら、命までは取らないから」

すでに戦意を喪失した相手に興味はないし、ヴェルトの限界は分かっている。

シユリネにこんな交渉にもならないような話を持ち掛けるのがいい証拠だ。

この男にはもう、戦う価値はない——だが、

「戦う気が、ないだと……!？ てめえの武器はここにある！ オレの腕を一本奪った程度で、もう勝った気でいるのか!？」

簡単に引き下がるような性格だとは、シユリネも思っていない。

「わたしと同じこと言うんだ。でも、わたしは勝った気でいるけど」

「——交渉決裂だなあ……ッ」

ヴェルトは腕を振るってシユリネの刀を床に叩きつけると、それを踏みつけてへし折った。

「これでてめえの武器はなくなった！ オレと殴り合いで勝負するか!？」

「それもいいかね」

「調子に乗ってんじゃねえ！ 武器もなしでオレに勝てるわけがねえだろうが!」

残った左腕を振りかぶり、シユリネへと向かってきた。

シユリネはそれを見て、また小さく溜め息を吐く。
 ——すでに決着はついているというのに、無駄なことをする。
 シユリネは構えを取ると、その場で腕を振るった。
 瞬間、ヴェルトの残った腕が切断され、宙を舞う。

「……は？」

「魔刀術——《水切》。魔法くらい、わたしだって使えるよ」

シユリネは薄い魔力の刃を作り出し、ヴェルトの腕を容易く斬ったのだ。

「な、あ……オ、オレの両腕を……！」

「まだやるの？」

「ひ……っ！ ま、待て。オレはもう、戦えねえ。頼む、見逃してくれ……！」

「それは無理」

「え——」

シユリネがヴェルトの首に向かって腕を振るうと、綺麗な切り口ができて、そのまま首が床に転がっていく。

「逃げるチャンスは何度もあったからね。あなたはたいたいなタイプって、このまま見逃すと逆恨みしそうだから」

ヴェルトの身体は脱力して、床へと倒れ伏す。流れ出る血液が広がっていくが、シユリネは気にせず前に出た。

「さてと……あとは消化試合かな」

そう言つて、シユリネは先頭車両へと向かつていく。——戦いが終わるのに、それほど時間はかからなかった。

結局、ヴェルトが倒されたことで残党達は降伏の道を選んだ。
 戦う意志のない者とシユリネは刃を交えるつもりはない——魔導列車の暴走を食い止めることには成功し、一先ずの護衛の任務は果たせた。

魔導列車に常駐しているはずの騎士はすでに殺されており、ヴェルト達の手際によさは評価できる点がある。

しかし、シユリネという存在が、彼らにとつては誤算だったのだ。

「大方、周辺の魔物も片づけたよ」

魔導列車の中で待機していたルーテシアとハインの下に、シユリネは戻ってきた。

現在、魔導列車が止まっているのは森の中心部——ヴェルトが暴れたことで車両に激しい損傷があり、すぐに動き出すことができない状態だった。応援の騎士がやってくるまでには時間がかかるために、この周辺にいる魔物をシユリネが討伐し、『血の匂い』を漂わせることで、魔物避けとしていた。いわゆる人を襲うタイプの魔物であれば、仲間がやられた場所にわざわざ近づこうとはしない。

シユリネはそういった魔物を選んで討伐してきたのだ。

「……」

ルーテシアは黙ったまま、シユリネの顔を見ている。

「？ わたしの顔に何かついてる？」

「いえ……貴女、魔物狩りもできるんだって思ってた。まあ、さっきの戦いを見ていれば、強いのは分かっていたけれど」

「この辺りには特別、強い魔物はいなさそうだから。でも、得物は壊されちゃった」

シユリネが今、腰に下げている鞘には折れた刀があるだけ——魔物を狩るのにも、魔法を使うしかない。

「わたし、魔力量はそんなに多くないから、武器がないと長期戦はできないんだよね」

「……それって、私に話して大丈夫なの？」

「ん？ なにが？」

「魔力が低い——それはすなわち、あなたの弱点になるのでは」

シユリネの疑問に答えたのは、ハインだ。

彼女は周囲を警戒しているようで、シユリネの方には視線を向けずに窓の外を確認している。

先ほどの戦いを経て、ある程度シユリネのことは信頼してくれているのだろう——ルーテシアの傍にいても、警戒する様子はない。

シユリネが刺客であるのなら、ルーテシアを始末する隙はいくらでもあったから当然と言えば当然だ。

「魔力が少ないから極力、魔法を使わない戦い方をする——だから、別に弱点にはならないよ。苦手な相手はいるけど」

「ふうん……。ああ、それと——お礼は言っておくわ、ありがとう。貴女のおかげで生き延びられたわ」

「いいよ、仕事だし。それより、報酬は用意してね」

「お金ならあるわ。引き継いだばかりだけれど」

「？ 引き継いだ？」

「——そのお話については、また後ほど」

また、ハインがシュリネの問いかけに答える。

ハインはおそらく、ルーテシアが狙われる理由を知っている。

一方で、ルーテシアはどうして命を狙われているのか——今も理解できていない様子だった。

故に、話の詳細を聞いたらハインの方なのだろう。

ここですぐに話すつもりはないようで、ルーテシアは少し不服そうな表情でハインを見ていた。

「私にも説明をしないつもり？」

「まず、お嬢様の安全を確保するのが先決ですから。どこで誰が聞いているかもわかりませんし」

「それは、そうね」

ルーテシアが納得したように頷き、ここでの話はまとまった。騎士が来るまでの間は大人しく待つしかない。

ただ、一つだけ確認しておくことがシュリネにはあった。

「あ、そうだ。ちなみにわたしとの護衛の契約は、どこまでにする？」

「どこまでって……」

問われたルーテシアは、ハインの方を見る。

「……少なくとも、しばらくの間は契約させていただきたく。ここでの護衛の報酬も含めて、まとめて話しましょう」

「分かった。じゃあ、しばらくはよろしくね」

どれだけ続くか分からないが、当面の間の稼ぎは大丈夫そうだ。

——王国の騎士がやってきてから、シュリネが思ったよりも早く列車から解放されることになった。

理由はただ一つ、ルーテシア・ハイレンヴェルクがいたからに他ならない。

ルーテシアは王国における五大貴族の一つ、ハイレンヴェルク家の現当主だと言うのだ。高貴な生まれというだけでなく、本当に高貴な人だったというわけだ。

刺客のほとんどはシュリネが始末して、一部は逃走している——逃げた者達については騎士が対応することだ。

——ルーテシアは結果的に、魔導列車で発生した事件を解決した人物、という扱いになったのだ。

目撃者が多かったのも救いだらう。

一部の人間は、シュリネが殺戮を繰り返していたと勘違いもしていたようだが、先頭車両の方にいた者達からすれば、間違ひなく命を救われたのだ。

その証言の信憑性が高い、と言ったところだろう。

後日、また話を聞かせてもらいたいとは言っていたが、特に行先などは告げることなく——シュリネは今、ルーテシアとハインの二人と共に、馬車に揺られていた。

一度、魔導列車を出発したアーゼンタの町に戻り、そこで調達した馬車で、向かう予定だった場所とは別のところに向かっているようだ。

「ねえ、予定した場所とは違う方に向かっているわよね？」

「はい、お嬢様。すでに予定通りには行かなくなりましたので」

「だからって、仕事を放って逃げろって言うの？」

不機嫌そうに、ルーテシアがハインを問い詰める。

先ほど命を狙われたばかりだというのに、仕事を優先しているのは中々肝が据わっている。

感心するシュリネだったが、彼女達の会話の内容についてそれ以上興味を示すこともなく、外の景色をただ眺めていた。

シュリネの役目は、とにかくルーテシアを刺客から守り抜くこと——それだけが条件なら、そこまで難しい話ではない。

「……そうですね、そろそろ説明が必要かもしれません」

「ようやく話す気になったのね。そもそも、主人である私に説明がないのがおかしいのよ」

「先ほどは急でしたので。本当は到着してから、全てをお話しするつもりでした」

「そう、なら早く説明して。仕事のことだってあるんだし」

「まず、今日向かう予定だった場所で、お嬢様の仕事はございません」

「……は？ どういうこと？」

「言葉のままです。全て、お嬢様の安全を確保するために、急ぎの用件があると偽った次第」

「どうやら、ハインがルーテシアに嘘を吐いて連れ出したようだ。」

つまり、ルーテシアは現状、本当に何も知らないままに命を狙われていることになる。

「私の安全って……貴女が私が狙われている理由、知っているのよね？」

「はい、存じております」

「なら、その理由を話しなさい。隠すつもりは……ないでしょう？」

「もちろんです。まず、結論からお話ししましょう。お嬢様の命は——この国の未来そのものです」

「……………何を言っているのか、全く理解できないんだけど」

ハインの言葉に、一層険しい表情を浮かべるのはルーテシアだ。

いきなり『この国の未来』などと過剰とも言える表現が出れば、当然の反応と言える。

「ルーテシアが女王にでもなるの？」

「な……そんなわけないでしょ！——ないわよね？」

シユリネの問いかけに、いったんは強く否定したものの、状況が状況だけにルーテシアはハインに問いかけた。

「はい、一応……お嬢様にもその権利はありますし、不可能ではありません。ただし、王族の跡継ぎがない状況であれば、というお話になります」

「なら、無理ね。第一王子に第二王子……それから第一王女までいるじゃない」

「問題はそこです。次期王の座——『五大貴族』がそれぞれ、選定に際して関わることになるのは御存じですか？」

「王が跡継ぎを決められずに亡くなられた場合、よね——まさか」

ルーテシアは何かに気付いたように表情を硬くする。

「まだ、お亡くなりにはなっておられません。ですが、すでに世継ぎを決められる状態はないとのこと」

「……そんな。でも、確かに……最近はお姿を見る機会が少なくなっているとは思っていただけ」

「本来であれば、次期王となるのは第一王子——アーヴァント・リンヴルム様となるでしょう。ですが、アーヴァント様の『よくない噂』はお嬢様も知っている通りです」

「そう、ね。彼を王とするかどうか、悩んでいるという話も聞いたことがあるわ」

シユリネは知らないが、どうやら第一王子は王の器うぐいに欠けている、というのが二人の話を聞いていると分かる。

「ですが、第一王子の支持を表明している家が、五大貴族のうち二つ。さらに、第一王女の支持を表明している家が……現状では三つ」

「ハイレンヴェルクも王女を支持する側ね——って、それって王女の支持をしている者を殺そうってこと……!?!」

「正確には、現状で当主の交代もあり、ゴタゴタ状態になるハイレンヴェルク家ならば狙いやすい——そんなところでしょうか」

「淡々とした口調でハインは言い放つ。」

つまり、ルーテシアが狙われている理由は、次期王を決める権利を現状持つており、彼女が生きている限り第一王女が次期王として決まってしまう——そんなところだろう。

「ハイレンヴェルク家の当主はお嬢様であり、仮にここでお嬢様がなくなってしまうえば……ハイレンヴェルクには跡継ぎはいません。没落、という扱いになり、控えている貴族のうち、アーヴァント様の側にいる貴族がその後釜に入る手筈まで整えているようです」

「何よそれ。私がいなくなれば自分が王になれる——だから、狙っているってこと……!?!」

「私の知る情報を精査する限りでは、そうですね」

「だ、大体、何で貴女がそれを知っているのよ……?」

「それは——前当主より、お話を聞いておりましたので」

「……お父様から?」

「はい。『私に万が一のことがあった時、娘を頼む』——そう、仰られていました。お嬢様を狙う動きがあったことを察知し、できる限り王都から離れ、時間を稼ぐつもりでした。そのために、仕事と偽ってお嬢様にはすぐに動いていただき、安全を確保した上で全てをお話しさせていただく予定だったのですが」

刺客の動きが想定よりも早く、今の状況になってしまった、というわけだ。

「……じゃあ、私がハイレンヴェルク家の当主として、アーヴァントを支持すると宣言す

れば、狙われることはなくなるのね?」

「その選択もございます。ハイレンヴェルクが第一王子の側につくという明確な意思を伝えられれば。おそらく、向こうはその可能性も考慮しているでしょう」

「……なるほどね」

すなわち、ルーテシアの降伏——命が惜しければ、降伏すればいい、というわけだ。

先ほどの状況で始末できればそれでよし、失敗しても、多くの刺客に命が狙われているということは、先ほど始末したヴェルトが言っていた通りなのだろう。

並の人間であれば、降伏の道を選ぶかもしれない。

「——まあ、私がああ男を支持しないと分かっているから、刺客を送ってきているんですよね。私、フレアと仲いいし」

「では、お嬢様は第一王女のフレア・リンヴルム様の支持を継続する、と?」

「あの男を支持する理由もないわ、貴女なら分かっているでしょう。あんな男、支持する方がどうかしているのよ。そのために、護衛を雇ったんでしょうに。……というか、そんな大事な話、早く話しなさいよ!」

「申し訳ありません、色々と急だったので。まずはお嬢様の安全確保に動いた次第です」
結局、何故ハインがルーテシア以上に王位継承の問題に詳しいのか、その点にルーテシ

アが言及せず、シュリネも問わなかったためにうやむやにはなった。ただ、ルーテシアが逃げる選択をしなかった以上は、シュリネの護衛の継続は確定だ。「ハインの話については、理解したわ。今の状況が分かったところで、せっかくだし貴女のことでも聞きたいわね」

ルーテシアがシュリネの方を見る。

この場において、二人の話の中では全く関係のない人物ではあるが——護衛の役を担うのはシュリネだ。

「ん、わたし？」

「そうよ、護衛として雇っている以上、素性くらいは教えてくれてもいいでしょ？」

「素性って言っても、別に珍しい話なんてないけどね」

「さつき、高貴な人を守る予定だった、みたいなこと言っていたじゃない」

「ああ、そのことか」

「その辺り、詳しく説明してくれたらいいわ」

「詳しくって言っても、特別なことはないって。護衛として初めての任務に就いた日——顔合わせに行ったらもう死んでいて、その罪をなすりつけられたっただけ」

「……いや、全然『だけ』で済む話じゃないわよ!」

「つまり、あなたは罪をなすりつけられたまま、逃げてきた、と？」

「違うよ。なすりつけた奴は斬った。どうせ人斬りとしての罪を着せられたのなら、いっそ人斬りになっちゃおうと思ってる。だって、強い人と戦うのは好きだから」

シュリネの言葉を受けて、ルーテシアは怪訝けげんそうな表情を浮かべる。

ハインもまた、驚いた表情で見ていた。

「なに？ おかしいところ、ある？」

「……おかしいところしかないと思うけれど、それで生き延びてきたのなら、強い理由は分かった気がするわ」

「なら、よかった。わたしも、あなたの護衛をしていたら、強い人とたくさん戦えそうだから——ちょっと楽しみたいわ」

「……私は勘弁してほしいわ」

揺れる馬車の中——三人はまず、安全を確保するために動く。

こうして、命を狙われた公爵令嬢と人斬りと呼ばれた少女は契約を交わした。

壊れた魔導列車の車両が停止しているすぐ傍では、何体もの遺体が並べられていた。列車を乗った者達が、貴族の護衛である少女に返り討ちにされた——それが、今のところの事実である。

そんな遺体を調べるように触れるのは、黒を基調としたスーツに身を包んだ男だ。

「……綺麗だ」

男は斬られた死体の傷を見て、小さな声で呟く。

「これほどの剣の使い手に、僕は出会ったことがない。本当は、無惨に殺された彼女の姿を見に来たというのに……嬉しい誤算とはこのことですね」

男は立ち上がると、嬉しそうな笑みを浮かべた。

そこへ、男の姿に気付いた騎士がやってくる。

「おい！ ここは立ち入り禁止だぞ！ 何をしている！」

男は慌てる様子もなく、向かってくる騎士に軽く会釈をして、

「ああ、申し訳ありません。少々道に迷ってしましまして」

そう、自然な立ち居振る舞いで言い放った。

「道に……？ この辺りは歩いてくるような場所ではないはずだが」

「途中までは馬車で来たのですよ。ですが、泥に嵌ってしまいここまで一人で」

「なら、線路沿いに戻った方がいい。魔物も出るし、危険だぞ」

騎士の助言は正しい。

だが、男はここまで魔物を斬り殺してやってきている——実際のところ、何の問題にもならない。もちろん、騎士に対してそんなことを告げるつもりもない。

「ええ、分かっていますとも。しかし、一つだけ質問を」

「なんだ」

「実は、この魔導列車の乗客に、僕の知り合いがいるはずでして。その方がどこに行かれたのか、知りたいのですよ」

「知り合い？ 名前は分かるか？」

「ルーテシア・ハイレンヴェルクです」

「ルーテシア——！ ハイレンヴェルク家の御息女——いや、当主様か。彼女と知り合いということとは、あなたも貴族か？」

その名を聞いた途端に、騎士の口調が変化する。

先ほどまでは横柄——とまでは言わないが、明らかに態度まで違う。

男の服装も相まって、身分の高い者と判断したのだろう。

すぐに、男は否定するように首を振る。

「いえ、僕はそのような大層な生まれではなく」

「そうか。彼女なら、魔導列車の出た駅に戻って——ん、ちょっと待て。あなたの顔、どこかで……」

「——失敬」

ヒュンッと風を切るような音と共に、騎士の首が宙を舞った。

「？」

何が起こったのか、騎士はまだ理解できていない。

最後に騎士が見たのは、男が手に持ったステッキから引き抜いた刃だ。

「僕もまだ捨てたものではないですね。いやはや、末端の騎士にまで顔を知られているとは」

帽子を目深に被り、顔を隠すようにしながら男は歩き出す。

魔導列車の向かう予定だった方とは逆。ここから移動するとしたら、一度戻って別のルートを使うだろう。

「楽しみですね……強い剣士と出会えるというのは」

男の名はエルバート・フェルター。

かつて王都で『人斬り』として名を馳せた——真正正銘の殺人鬼だ。



第二章 もう一人の人斬り

——『レヴァンテの村』に、シュリネの姿はあった。

ここは王国の中でもいわゆる辺境と呼ばれる場所であり、道も途中までしか整備されておらず、馬車でやってくることはできない。

小さな村で、同時にのどかな場所であった。

この近辺には人を襲う魔物も多くは生息していないのだろう——仮にいたとしても、おそらくは村人が対抗できるレベルなのだ。

こういった人が暮らしやすい辺境地というのは、どこの大陸にも複数存在している。

「ふあ……」

シュリネは空を見上げながら寝そべり、小さく欠伸あくびをした。

魔物を狩る必要がなければ、現状は仕事がない。

ルーテシアとハインは一先ずここを拠点として身を隠すつもりのようなようで、空き家を一ツ村長から借りていた。

護衛ならば近くにいろ——そう思われるかもしれないが、シュリネならば、この村の付近に『怪しい奴』が近づいてくればすぐに気付くことができる。

そのため、今は自由時間を満喫していた。

だが、辺境地でやることと言えば、こうして昼寝するくらいのものだ。

何かしら仕事でも見つかればそれを受けるのも以前はありだったのだが、今はルーテシアと契約している。

「……そう言えば、契約金の話をまだしてなかったなあ」

護衛をする以上、その対価は求める。

先ほどの話を聞く限り、大貴族の当主であるルーテシアなのだから、資産はそれなりにあるのだろう。

だが、金持ちだからと言って必要以上に金を取るつもりはない。

あくまで、仕事に見合った報酬をもらおう——それが、シュリネの信条であった。

「こんなところで何しているのよ」

寝そべるシュリネの下へ、ちょうどいいタイミングでルーテシアがやってくる。すぐ傍にはハインがおり、常に彼女を護衛しているようだ。

「契約金のこと考えてた」

「！　そう言えば、色々ありすぎてまだ決められてなかったわね。ごめんさい」
 「別にいいよ。一先ず、ここでのご飯代とか払ってもらえてるし」

「正式な契約書も作成しておきたいですね。書類の準備をして参りますので……」
 ハインはそう言って、シュリネを見る。

ルーテシアを頼む——そう言いたいのであるろう。

「敵は近くにいないから、大丈夫だよ」

「ハイン、お願い」

「承知しました。では、少々お待ちくださいませ」

ハインは書類を作りに戻っていった。

残ったルーテシアが、シュリネの隣に座る。

「静かな場所よね、ここ」

「そうだね。わたしは嫌いじゃないよ」

「私も……こういうところは好き。落ち着くし、変なことを考えずに済むから」

「変なこと？」

「仕事のこととか。貴族って結構、大変なのよ？　何もせずに生きていられるわけじゃないんだから」

「だろうね」

「こうやって、命を狙われて逃亡生活する羽目にもなっているし」

「それは自分で選んだ道じゃない？　逃げようと思えばできるよね」

「——私が逃げたら、大勢の人が苦しむことになるかもしれない。だから、逃げるのは絶対にありえない」

ルーテシアははつきりとした口調で言う。

第一王子とルーテシアの間に何があったのか分からないが、かなり嫌っているようだ。もちろん、好き嫌いだけで支持を表明していかないことも分かる。

おそらく、第一王子が王になると、この国の不利益になるといことなのだろう。

それを阻止するために、ルーテシアは生き延びなければならぬのだ。

「わたしはあなたみたいなの、嫌いじゃないよ」

「え？」

「わたしはね、初めから逃げる人とは戦わないことにしてる。やる気のない相手と戦ったって、結局後味が悪くなるから」

「……私は貴女みたいなのを追われたら逃げるわよ？　今だって命を狙われて逃げているのだし」

「勝てない相手から逃げるのは当然だよ。でも、あなたはただ逃げてるわけじゃない。だから、嫌いじゃない」

「それは、褒め言葉として受け取っていいのかしら？」

「わたしは褒めてるつもりだよ」

「……そう、ならいいわ」

初めて二人きりで話をして、なんとなくルーテシアという人がシュリネにも理解できた。彼女は正しいと思ったことをする人間だ——それを高貴な人というのだと、シュリネは考える。

(こんな形で、わたしの力が役立つ日が来るなんてなあ)

そう、空を見上げながら思うのだった。

契約書にサインをして、正式にシュリネはルーテシアの護衛となった。

契約金については後払いとなるが、先ほどの魔導列車の護衛については、きちんと料金を支払ってもらっている。

ある程度の手持ちはあるようで、シュリネも特に不満はなかった。

シュリネは村で唯一、加工技術を持っている工房を訪れていた。

ここでは主に農業に使う道具を作っているようで、老人とその孫と思われる若い男がいる。シュリネが持ってきたのは、折れた刀だ。

「これ、どうにか直せないかな？」

「こいつあ——刀か。さすがにこういうのは技術がいるぜ。爺さん！ 昔に剣とか作ってたって言ってたよな？」

「……ああ」

カントツ、と金属を叩く音を響かせながら、その手を止めることはない。

「いったん手を止めて、見てやってくれよ！」

「……ちよっと待ってろ」

「——ったく、悪いね。爺さん、仕事中に別のことはできない性質たちでさ」

「いいよ。わたしは依頼してる立場だしね。あなたは剣を作ってないの？」

「オレは農具とか、そっちが専門でね。爺さんも今は武器は作ってないんだ」

「そうなんだ。待たせてもらってもいい？」

「ああ、もちろんさ」

シユリネはしばし工房に留まり、老人が作業を終えるのを待った。

響き渡る金属音を聞きながら、作業を眺めること一時間——ようやく、老人がシユリネの刀を手にとった。

「……東の武器か」

「うん、これを直せないかなって」

「刀はこっちでは珍しくはあるが、わしなら直せる」

「！ 本当？」

「ああ。無論、完全な形にするのはどうあれ難しい。刀というのは、それだけ繊細な武器だからな」

「大丈夫だよ、使えるようにさえなればいいから」

これは運がよかった、とシユリネは喜ぶ。

刀の扱いは難しく、下手をすればこの地方では直せないのではないかと思っていた。

老人はしばし刀を見据えたあと、シユリネを睨むようにして問いかける。

「……それで、この刀で何人殺した？」

「え？」

「何人殺したかって、聞いてんだ」

「具体的な数なんて、覚えてないけど。それがどうかしたの？」

「わしはな、もう人を殺す武器を作るつもりはないし、直すつもりもない」

老人は途端に険しい表情を見せ、刀を近くの机へと置いた。

「ええ!? 一本くらいやってくれないでしょ？」

「……ダメだ。他を当たってくれ」

「他がないから頼んでるのに！」

シユリネは抗議するが、仕事を受けるか受けないかは工房が決めることだ。

老人はすぐに作業に戻ってしまい、取り付く島もない。

「せっかく待ってたのになあ」

「悪いいな、爺さんの説得はオレがしてみるから、こいつは預かってもいいか？」

若い男の方は抵抗がないようで、本当に申し訳なさそうに言う。

おそらく期待はできないだろうが、折れた刀を持っていても仕方ない。

「分かった。ここにいる間は預けておくよ」

シユリネはそう答えて、工房をあとにする。

——金はあるって、直してくれる人がいなければ仕方ない。

武器がなくても守ることはできるが、シュリネにとって魔法は切り札の一つだ。最初から使っているのは、相手によっては魔力切れを起こしてしまう。せめて、他に武器になるものがあればいいが——ここではあまり期待できそうにない。「……まあ、何とかなるといいな」

シュリネはポツリと呟きながら、空を見据えた。

「遠くからだんだんと雨雲が近づいており、ゴロゴロと雷の音が聞こえてくる。しばらくはここに滞在する予定のはずだが、武器もない状態で護衛を続けなければならなかった。」

——それから数日、村に留まったルーテシアとハインは、村の農業の手伝いをしていた。またある時は、村人が困っていることを聞き、その対応策を一緒に考えるなど、ほんの数日足らずですっかり村に溶け込んでいた。

さすがは大貴族というべきか、ルーテシアは人に好かれるカリスマ性を持っているらしい。

身を隠している現状でも、何かせずにはいられない性質といったところか。

そんなルーテシアに付き従っているハインも、何でもできる万能型、という感じで、常に彼女を傍で支えている。

一方、シュリネはというと——村の近くの川で釣りをしていた。

すぐ近くでは子供達が遊んでいて、先ほどまでシュリネも一緒に川遊びをしてびしょ濡れになっている。

木剣を使った遊びでは、シュリネは子供達に文字通り『無双』してみせた。

子供の遊びに本気を出すな、と言う者もいるだろうが、こういった田舎では逆——シュリネの動きは純粹に子供達の憧れとなり、あつという間に打ち解けることに成功する。

「——意外ですね」

そこへやってきたのは、ハインだった。

小さなカゴを手にして、中にはいくつかの植物や果物が入っている。

村の人に頼まれて、この近くまでやってきた、というところか。

「何が？」

「あなたのような人が、子供達と打ち解けていることです」

「それって褒めてる？」

「意外な面がある、という話をしています」
 「わたしだって、これくらいはね」

「子供達が楽しんでるのなら、何よりです」

ハインはそう言って、優しい表情を浮かべて、遊ぶ子供達を見ていた。

むしろ、シユリネからすればハインの方が意外に見える。

「あなたこそ、どうしてルーテシアの護衛をしているの？」

「どうして、とはどういう意味でしょうか。私は幼い頃からお嬢様に仕える身です。おかしなところなどないでしょう」

「ふうん……。なら聞くけど、わたしに護衛を頼んだ時さ——あなた一人でも、切り抜かれたよね？」

「——」

シユリネの問いかけを受けて、ハインの表情は途端に鋭くなった。

殺気にも近い表情を向けられ、シユリネは肩を竦める。

「別に、言いたくないならいいよ」

「何故、私が一人でも切り抜かれると思ったんですか？」

「そんなの、動きとか見れば分かるよ。あなたはどちらかと言えば……暗殺者っぽいけ

ど」

「……そうですか。やはり、あなたは鋭いですね」

それは、もはや正解と言っているようなものだ。

ハインはルーテシアの護衛で、付き人で——同時に暗殺者でもあるのだ。

むしろ、本業は暗殺なのではないか、とシユリネは推察する。

そんな彼女が、ルーテシアの護衛として常に傍に居るという状況には、少し違和感がある。

「……と言っても、別に特別な理由はありません。私はお嬢様に仕える身——それ以上でも、それ以下でもありませんので」

「そっか。まあ、理由を聞きたいわけじゃないからさ」

「私からも一つ。武器の方は調達できてないようですが、護衛は大丈夫なのですか？」

「ああ、一応それらしいものは一つあるよ」

シユリネはそう言って、自身の横に置いてある物を見せる。

「……鈍、ですか」

「まあ、こんなのも魔導列車で襲ってきた奴らくらいなら十分にやれるからね。ないよりはマシだよ」